

「松下アジアスカラシップ」詳細

助成番号	研究テーマ（留学目的）		
	留学国	留学機関	留学期間
	氏名	所属	区分
01-006	朝鮮民族舞踊の習得と現代舞踊における民族舞踊の影響の研究		
	韓国	梨花女子大学	
	芳賀 弓	慶應義塾大学	学部生

研究テーマ（留学目的）の説明（助成決定時のテーマ。文責は本人）

私は日本人でありながらも本当に幼い頃から朝鮮のチャンダン（リズム）に惹かれ、朝鮮舞踊に魅力を感じていた。小学校4年から日本人は私一人という環境の中で在日朝鮮・韓国人に混じって朝鮮舞踊を習い始め、その中で私が日本人の血を持ち、日本で育った事、そしてその日本文化の中に溶け込んでいる朝鮮文化の存在に強く惹かれた。それは日本文化・歴史の一部であり、異文化でもあるからだ。

また、興味深いのは、私が学んできたのは現在の北朝鮮で盛んである崔承喜が始めた近代朝鮮舞踊であり、それに対して韓国で盛んな古典、現代舞踊とは多少異なることだ。実際根は同じである「朝鮮民族舞踊」をきちんと理解することは、日本と韓国を、ではなく日本と朝鮮半島そのものをつなぐ事だと確信している。

韓国の現代舞踊は、現在日本でも大変注目されている。日本とは異なり、現代と古典がうまく融合されており、舞踊家を専門的に教育する大学がたくさんあるからだ。今までバレエ中心である西洋舞踊が優位であった舞踊界にアジアの国同士が手をつなぎ、アジアの美の表現を取り戻そうとする動きが確実に起こり始めている。これは日本とアジア諸国の関係を芸術面からも構築していこうとする大変有意義な動きだ。しかし、実際には日本の舞踊界と韓国を結ぶ人材が少なく、また時々合同公演が行われても十分な理解がなされないまま不完全燃焼に終わるのが現状である。

また、韓国では日本のそれと違って、舞踊科が多くの大学に設置されており、またたいの舞踊家は大学院まで卒業したものの方が多いと言うほどに高等教育の対象として舞踊が高く位置づけられている。それと同時に韓国でポピュラーな現代舞踊の多くは古典舞踊を基本としたもの、または民族文化をテーマとした創作舞踊である。舞踊を専門教育とする学校の少なく、バレエを基礎とするジャンルである現代舞踊が定着している日本はこの韓国の現状から学べることが少なくないだろう。

それらをまとめ、自分が身をもって朝鮮舞踊を踊れる存在としてこれらを研究し、日本に紹介すること、またお互いがよい刺激となって新しい舞踊の可能性を探っていくことにとって、この研究は不可欠である。

成果報告書

助成番号

01 -006

氏名 芳賀弓

留学先国名
大韓民国機関名
梨花女子大学→韓国国立総合芸術大学

私は貴財団により、1年間のアジアスカラシップ奨学金の助成を受け、2002年2月より2003年2月まで韓国梨花女子大学に交換留学生として在籍した。その助成期間中に韓国国立芸術総合大学大学院の入学試験を受け、助成期間を終了して帰国後、日本の大学を2003年3月に卒業すると同時に韓国芸術総合大学大学院舞踊科修士課程へ進学した。2004年2月からは韓国政府招聘奨学生の認定を受け2004年9月まで在籍したが、事情により留学の継続が不可能になり、帰国した。2003年8月から2004年2月の休学期間を除き、韓国には約2年間留学していたことになる。

(1) 論文・発表による成果

- 2002.9 『日本植民地支配が残した芸術—新舞踊』於：韓国梨花女子大学 p.9 韓国語
 2002.10 『北朝鮮の舞踊』於：韓国梨花女子大学
 2002.12 『伝説ではない舞姫、崔承喜』於：韓国梨花女子大学 p.11 韓国語
 2003.6.15 『崔承喜と新舞踊の考察』於：韓国国立芸術総合大学大学院 p.25 韓国語
 2004.5.28 『日本の舞踏』於：韓国国立芸術総合大学大学院
 2004.6.18 『日常性の中の非日常』於：韓国国立芸術総合大学大学院

- 韓国梨花女子大学 仮面劇鳳山タルチュム (2002. 5. 29)
- 韓国国立芸術総合大学 実験舞踊祭 ソン・ヨンミン振付『レクイエム』(2002.10.4-5)
- 韓国 KNUA 舞踊団定期公演 フランソワ・ラスカル振付『bord de peau』(2003.5.12-15)
- 韓国 Dream&Vision ソ・キョンソン振付『二つの未熟』(2003.7.4-5)
- 韓国 KNUA 舞踊団定期公演 キム・ジョンミン振付『フロイトの鼠』(2004.5.22-23)
- 韓国国立芸術総合大学 showcase 芳賀弓振付『Music for Strings, Percussion and Celesta』習作 (2004.6.12)
- 韓国 Dream&Vision キム・ジョンソン振付『少年時代』(2004.6.12-15)

(2) 資料調査

過去の論文を「崔承喜(注)」「日帝(植民地)時代」「新舞踊」の3つに視点から分類し、その中の参考文献をあたり当時の文化政策や人々の「近代」の認識といったそれらの論文で考察されていない部分の再検討を行った。それと共に、まだ多くの資料が調べられていない新舞踊の始まりとされる来韓公演をした日本の舞踊家石井漠、韓国の伝統舞踊を舞台化させた韓成俊、崔承喜とはまた違う方法で日本のレビューショーのダンサーから新舞踊の舞踊家になった裴亀子の3人に焦点を当て、資料を収集した。一番の収穫であったのは、北朝鮮の「舞踊基礎理論」「党の文芸方針解説」「舞踊表記法」「舞踊文芸論」を入手したことである。また、韓国で出版あるいは発表されている北朝鮮舞踊関係の資料を当たれたことも大きかった。なぜなら北朝鮮では「古典」は否定されているため民族舞踊の「改良」という形でそこに近代舞踊と民族舞踊の融合が行われており、現在の韓国での創作韓国舞踊のルーツになるものがあるからである。

注: 崔承喜

南北朝鮮両国の舞踊発展の基礎となっているのが、崔承喜である。日本で「半島の舞姫」と呼ばれた崔承喜は戦前の日本で東劇・帝劇・歌舞伎座といった一流劇場を連日満席にし、各界の著名人たちにも多くのファンをもつ舞踊家だった。朝鮮出身の彼女は韓国公演にきた石井漢の公演を見て即単身日本に渡り、石井に師事。舞踊団で頭角を現すが、その後朝鮮に戻って朝鮮民族の伝統的な踊りの要素を自分の舞踊のなかに積極的に取り込んでいった。当時の日本政府が植民地支配していた朝鮮半島に対し、日本語教育や創氏改名に代表される同化政策を取っていた中で、崔承喜は堂々と朝鮮の名前を名乗ってスターになり、舞台の演目でもあえて「朝鮮風」のものをモチーフにしている。当時の彼女は日本から世界に向けて、朝鮮人としての民族的アイデンティティを発信していた。そしてそれに対し、多くの日本人たちが拍手喝采して声援を送っていたという。日本と朝鮮半島のみならず、第2次世界大戦下の世界を舞踊という芸術で結び続けた崔承喜はその後日本の敗戦、朝鮮分断を経て激動の時代を象徴する人生を送る。未だに北は多くを明らかにしていないが、北で踊られているモダン化された民族舞踊の多くは彼女の振り付けが元になっており、彼女の確立した「朝鮮民族舞踊基本」の訓練を継承して稽古が行われていることも事実だ。韓国では約10年前に彼女の研究が解禁されてきたが、民族的なものを西洋の表現と結びつけ、その表現の向上を図るという基本的な姿勢はまさに崔承喜が始めたことであった。

そして、その基となったのが、先にドイツ表現主義のモダンダンスを取り入れていた日本の存在であったことも特筆すべきである。北と南のみならず、一度は植民地として抑圧した日本の存在を踊りによって結びつけた彼女の存在は、これからの3国の関係に大きく関わるものがあるのではないかと考えている。

(3) フィールドワーク

韓国で今踊られている「伝統舞踊」を実際に学びつつ、北朝鮮で行われている朝鮮舞踊との比較をしながら分断後それぞれが一度受容した「モダンダンス」をどのように発展させていったかの比較を実際に体で学びながら行うことにより、これからの発展の可能性と問題点の検証を行った。授業では伝統舞踊と現代舞踊両方を学ぶことにより、現在行われている教育の現状を知り、大学院へ進んでから創作を学ぶことによって、その中で現在の「創作＝過去と現在の融合」がどのように成されているのかを体感することとなった。この際創作の作業を様々な人で行い、公演活動を通して現在の韓国舞踊界の現状や、問題点を多く把握できたように思う。また鄭炳浩先生(中央大学名誉教授、韓国民族舞踊学者、日本で唯一民俗舞踊の著書が翻訳されている)の自宅で行われているゼミに参加し、民族舞踊の概論を学びつつ、実際に現地へ行って、民衆の間で行われている祭事での舞踊のありかたなどをみる事ができた。

学ぶだけでなく、なるべく共に交わすことも重要視していたが、韓国無形重要文化財の李梅芳と日本舞踊の藤間蘭黄が出演した「世界無形文化財招請シリーズ 東洋舞踊の中の女形」という公演の制作・通訳として関わったり、日本のコンテンポラリーダンスや舞踏の公演ビデオ上映会、オープンレクチャーを通して日本の様々な舞踊シーンをなるべく多く伝えるよう努めた。それに対する反応や交わした意見から得られるものはまた大きかった。

韓国で行われていた舞踊の公演は古典、現代に関わらずなるべく多く鑑賞し、そのレビュー、批評と、舞踊の解説(歴史性)をまとめて随時ホームページ上で公開した。実際に日韓の舞踊交流が盛んになってきた今日、韓国の舞踊の状況を知りたい、と専門家や一般人からも多くのアクセスがあり、現在ダンス雑誌の韓国特派員として韓国の舞踊情報を報告する仕事にも繋がった。また、韓国では教育の場でも、ある程度の年齢と経歴がない限り海外での公演や国際コンクール参加が認められないために、保守的な作品や優等生的なダンサーばかりが多く来日し日本ではある一つの「韓国的現代舞踊」という、「先入観」が出来上がっている事実がある。若く、个性的で日本にもよりよい刺激を与える舞踊家や振付家に多く日本での公演やコンクール参加の機会を与えるため、企画及びコーディネーターとして仲介をする活動をした。(実績例: 横浜ダンスコレクション第5回ソロ×デュオコンペティション 横浜市芸術文化振興財団賞及び在日フランス大使館賞受賞 ジョン・ヨンドウ コーディネート、 横浜ダンスコレクション第6回ソロ×デュオコンペティション出場 キム・ソル、ノ・ジョンシク コーディネート、第37回埼玉全国舞踊コンクール バレエジュニア部門出場予定 ジョン・ウニョン、パク・ソミン、イ・ジンシル コーディネート)



右 2 点 : 韓国梨花女子大学でのタルチュムの公演、及び終演後



右 2 点 : 梨花女子大学での韓国舞踊の授業風景(青いスカートが本人)



上 3 点 : 韓国国立芸術総合大学での練習風景



終演後の楽屋にて(一番左が本人)